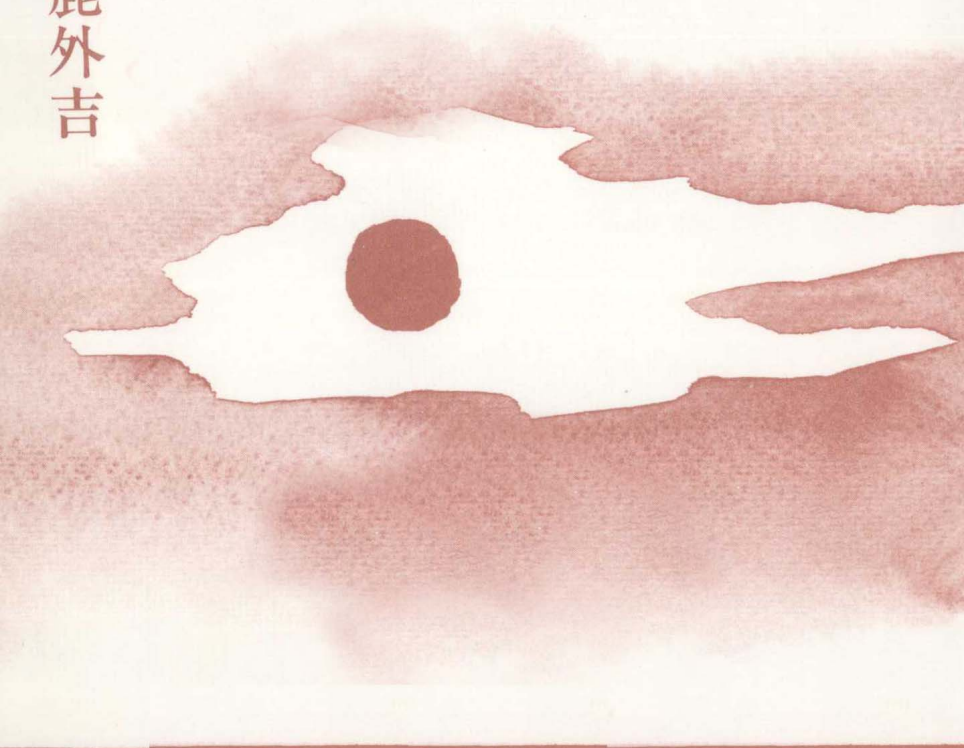


色の海

草鹿外吉



草鹿 外吉（くさか そときち）

1928年8月，神奈川県に生まれる。

現在 日本福祉大学教授，早稲田大学講師（ロシア文学専攻）

著書『ソヴェト文学と現代』（光和堂），『ソルジェニーツィンの文学と自由』（新日本出版社），『世界の詩 ロシア・ソビエト』（さ・え・ら書房）他。

詩集『さまざまなとしのうた』（光和堂），『海と太陽』（青磁社）

訳書 トリーフォノフ『気がかりな結末』（集英社），プーシキン『抒情詩』（プーシキン全集第一巻，河出書房新社），ブリューソフ『南十字星共和国』（白水社）他。

灰色の海

1982年7月15日 初版

定価 1600円

著者 草 鹿 外 吉

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(478) 3311 (代表)

振替番号 東京 3-13681

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前承諾をお求めください。

目次

どこにいても……

5

マストの上 33

一冊の本 64

青い軍帽 92

きみも逝きにし

122

提督たち 153

少年たち 184

訃報 214

原爆 245

金色の窓 293

灰色の海 341

あとがき 375

灰色の海

装
丁

渡
辺
皓
司

どこにいても……

1

白い石の塀の上、騎兵隊の槍ぶすまさながらに斜めに連なる忍び返しを片足でひょいとまたぐと、駒夫はそっと立ち上がって、主のない城塞のように静まり返っている常盤伯爵の邸内を見下した。車寄せのあなたは、山裾の草地におかれている大きな犬小屋は、午後の陽ざしに向かってぼっかりと口を開けているが、その中にも、その附近にも、あの意地悪なぶちのボルゾイ犬の姿は見えない。大方、小なまいきな書生が散歩にでも連れだしたのだろう。夏の日のこの時間になると、いつも玄関ポーチのかたわらの水道蛇口にホースをつっこみ、うねうねとその先をひっぱって車寄せの前の花壇のバラに水を注いでいる外廻り専門のじいやの姿もない。閉ざされた石門の向こう側に鈍い光を放つ瓦屋根、じいやと女中頭格のばあや夫婦の家のあたりにも、人氣は感じられない。

クリーム色の壁にこげ茶の柱、切り立つ青黒い屋根瓦、暖炉の煙を集める煉瓦組みの塔、北歐風和洋折衷式の邸全体が、七月の午後の陽ざしに黙々と耐えている。

「ざまあ見ろ」と、駒夫は思いながら、塀の下に黒く湿った土の上にとびおりる。わずかに前かがみの姿勢でとびおりたせいか、両手をついてしまった。手のひらの土をはらうとかれは、低い檜の木立のあいだをすりぬけて、乱雑に咲き狂っているカーネーションをかきわけ、邸の壁ぎわに出る。頭

の上のひらいた窓は、女中部屋。その下を運動靴で小走りに通りすぎ、やがて南向きの広い庭園、その向こうの杉木立、雑木の山などが見える建物の角まで、駒夫は進んでいく。西南の角の部屋、黒っぽい棧に厚いすりガラスのはまった窓が、外に向かって観音びらきにひらいている。駒夫はのびあがると、右手をいっばいにのびし、ひらいた片側の窓のすみを軽くたたき、部屋の中で人の動く気配がし、窓がまちに六歳ほどの黄色いブラウスの女の子が姿をあらわして、窓下をのぞきこむ。

「あら、駒兄ちゃまったら……」

「桃ちゃん、一人」

「そうよ。また、塀をのりこえたの」

「うん。上がつてもいいかい」

「いいわよ」

駒夫は、つき出た窓がまちに両手をかけ、とび上がるとするが、とても無理だ。桃子は窓がまちから上半身をすっかりせりだして、下をのぞく。

「だめよ。バルコニーから入ってらっしゃいよ」

「ばあや、いないかな」

「いないわよ。いたっていいじゃない……」

駒夫は南向きのバルコニーの下を走り、階段をのぼり、ちょっと立ちどまってから運動靴をぬぐと、それを左手にぶら下げて、桃子の部屋のドアに近づく。

「つまんなかったのよ、とつても」と、駒夫を迎えた桃子は、前髪を長目にたらし卵型の顔をふりむけると、不釣り合いに大きな目を見ひらき、声をあげた。「お父さまとお母さまは、きのうから東京でしょ。ジョンも青木も一緒にいっちゃったし……」

「みんな自動車でかい」

「そうよ。ジョンのお嫁さんがしたとかって……馬鹿にしてるわ」桃子は、だれがなにを馬鹿にしているかにはおかまいなく、ちょっと甲高い声をだす。

「でも、駒兄ちゃまったら、このごろどうして、いつも塀をのりこえてくるの？」

「だって、門がしまってるもん」

「呼び鈴、鳴らせば」

「ジョンが吠えるもん。それに、青木さんだってこわい顔するし……」

「青木なんかこわくてもいいのよ」

「そうかなあ」と、駒夫は白くて細い顔のまん中の丸い鼻をふくらませるようにする。駒夫の両眼も、大きくはつきりと見ひらかれ、茶色い瞳孔と白目との対照が、まだ幼年期のあざやかさを失っていないかった。

そのとき、赤地に黄色い獅子の模様の絨緞の上に読みさしのままひろげた桃子の部厚い童話集が、杉木立から吹いてきた風にばらばらとめくられた。二人の目がそちらに向いたとたん、邸の奥に通じる大きなガラスドアに人影が近づいてくる。

「ばあやよ」と、桃子が走り寄る間にドアがひらき、五十がらみの大柄な女が、割烹着ごとのぞきこんだ。

「まあ、また塀をのりこえて……」

「いいのったら、ばあやはあっちへいって」と、走り寄った桃子が、ばあやを押しだしてガラスドアをしめようとする。

「いけませんよ、桃子さまは。さあ、お召しかえですよ」と、ばあやはそのまま桃子を連れ去ろうとした。

「いまは嫌、嫌だってば」と、今度は桃子は足をふんばる。

「嫌だつてばあ、駒兄ちやまあ」

駒夫はあわてて走り寄つて、桃子の片手をつかむ。ばあやは左手で桃子の右手をにぎり、右腕を彼女の背にまわして、割烹着の胸に抱きこもうとした。桃子は腰をひいて、両足をふんばり、駒夫はその左手を夢中でひっぱりこむ。そのとたん、ふり向いた桃子の顔を見て、駒夫はいまにも声を上げそうになった。

あたりは傾斜した草むらで、真紅の彼岸花が一面に咲いている。さながら、無数の炎のむれにかこまれているようだった。そここに黄色い火花とおぼしいのは、返り咲きのタンポポである。「坊ちゃん、危いよ」と、下の方から女中の松の呼ぶ声がする。「待つてえ」と、こちらをふり向いたのは、桃子ではなく、色黒で丸顔のよし子であった。いつの間に桃子とよし子が入れかわってしまったのだらうと考えるひまもなく、駒夫は、よし子の泣きだしそうな顔の方に右手をさしのべる。急な斜面に不安定な形で身をかがめ、左手で雑草の根方をしっかりと握る。彼岸花の花弁の炎の先端がほつたに触れ、初秋の午前の陽ざしが早くも夏とはちがうぬくもりを伝えてくる。斜面の下方からさしだされたよし子の手に、駒夫の手はなかなか届かない。もうひと息。駒夫は、やや腰を浮かし、いっそう不安定な姿勢になりながら右手をいっぱいにのばす。その三本の指先によし子の指先がかかり、一歳下の彼女の体重が駒夫の腕にずっしりと伝わったとたん、かれのシャツと半ズボン姿は斜面をころがっていた。急回転する青空、赤い花、草むら……よし子の悲鳴、松の声……。

全身に衝撃をうけたようにぎくりと震えて、駒夫は眠りから目ざめた。カーテンのすきまからもれる初夏の朝の光を目にして、駒夫の意識にやっと自分の横たわっている状況がよみがえってきた。隣のベッドの小宮山も、すでに目ざめている気配である。寝室の奥の三年生たち、一号生徒たちのベッドは、不気味に静まり返っている。やがて、廊下のスピーカーに電源の入る唸り、マイクを動かすうつろな響き。そして、週番生徒の低い声が聞こえてくる。「総員起こし五分前」

昭和二十年（一九四五年）五月二日、ここ広島県安芸郡、江田島海軍兵学校大原分校にめぐるし
一日の日課がはじまろうとしていた。駒夫の所属する七六分隊の寢室では、三年の一号生徒十五
名、二年の二号生徒十四名、そしてこの四月十日に入校したばかりの駒夫たち一年、三号生徒十五
名、計四十四名の少年たちが、息をひそめて、起床ラッパを待ちうけている。

「三号、ごそごそ動くな」と、一号生徒のだみ声が聞こえてきた。目がさめても起床ラッパが鳴り終
わるまでは身じろぎひとつしてはならない。これが、海軍兵学校の一日における、まず第一のしきた
りである。けれど、しきたり通りやっていたのでは、運動神経の鈍い駒夫には、とても追いついてい
けない。まわりに覚られないようにそっと寝巻のひもをはずし、袖もはずしてしまう。いつでも起き
上がる構えである。巻きついていっている毛布の裾も、そっと平らにする。それから沈黙の五分の中で、
あらためていまの夢を反芻してみた。その夢の名残りは、タンポポやカーネーションの甘い匂い、桃
子のクリームのウエファスのような香りを、思いださせ、およそこの場にふさわしくはなかった。け
れど、三週間の荒々しい入校教育の間に、いつしか駒夫は、現実ばなれした想像や空想の世界にと
おり逃げこむすべを、自然に会得してしまっていた。その想像と空想の時間としては、海軍特有の
「五分前」は最適だったといえる。たとえば食事時間の五分前、全校生徒は東西に分かれた大食堂の
入口前に整列し、休めの姿勢で待機する。こんなときには、頭上の雲を眺めながら、はるか見知らぬ
国を想像するのだ。姉から譲られた「アラビヤン・ナイト」の二巻本に描かれた豪華絢爛たる絨緞や
寶石の都に、シンドバードよろしくあの雲に乗っていつてしまおう。そうだ、いますぐ。そうすれ
ば、この「獐猛」の一号どもが「待て」とどなろうが、「なにかあ、貴様は」とわめこうが知ったこ
とではない。

それから、海軍独特の哀愁のこもる巡検ラッパのあと、当直監事の巡検がまわってくるころ、毛布
にくるまって駒夫は、ゆったりと空想にふけるのであった。入校教育がどんなに苦しくても、一号に

いかに追いまわされようと、それでもかれは、巡検ラッパとともに眠りこむということはなかった。そして、起床ラッパでがばとび起きるということもなかった。寝入りばなには必ず想像と空想の時間があり、空想はしばしば、そのまま夢となった。どんなに疲労していても、夢をひとつも見ない夜は、駒夫にはほとんどなかった。

「それにしても今朝の夢は妙だ」と、駒夫は目をつむったままに思った。よし子と家の裏山から落ちてひたひたに傷をつくったのは、まだ小学校に上がるか上がらないか、十年近くも昔のことである。それが実にあざやかに、色彩までついて夢によみがえってきた。しかも、場所柄もわきまえず決戦下の海軍兵学校のベッドの中では。鎌倉の家の近所にある農家の娘よし子とは、小学校に上がるころから遊ばなくなり、駒夫が中学校に入るころには、道ですれ違っても、なぜかお互いに相手を避けるようになってしまった。そのころには、二歳下の桃子とも、とくに遊ばなくなってしまうていた。

桃子の祖父は皇族であり、父親の宣彦が臣籍降下して常盤伯爵家をひらいた。鎌倉の町の東のはずれ、古い禅寺に近い山裾に常盤伯爵家の宏荘な邸は、駒夫が物心ついたころにすでに建っていた。しかし、この家の持ち主たちを見かけたものは、ほとんどいなかった。表門の二枚の鉄扉はつねに閉ざされたままで、邸内にはまるで人氣がない。小学校に入る前の駒夫は、土地の農家や職人の子どもたちと組んで、ときたまこの邸内に闖入した。はじめてしのびこんだとき、南向きの広い石のバルコニーから広がった芝生と、幾何学的に区切られた花壇の華麗さに、わが家の植え込みの庭しか知らない駒夫は、一驚したものであった。闖入するたびにしゃがれ声でどなり立てたり、あるときはホースで水をかけたりするこわいじいさんのいるこの邸は、駒夫にとっては長いこと謎の城館であった。

ある年の正月、当時、海軍大佐だった父親の薬田源一に連れられて鶴ヶ岡八幡宮に初詣でした駒夫は、家の近くの往還で片腕をぐいと源一にひきよせられた。ふり仰いでみると、父親は向かい側から近づいてきた親子連れに向かって、いまでもソフトをあげようとしているところだった。

「いやあ、久しぶりですな。御帰国のおもむきは承っていたのですが……」

「こちらこそ、失礼しております。正月は御在宅ですか」と、近づいてきた濃紺のオーバーの紳士も、ソフトをぬぐ。つややかな黒い髪がきちんと分けられ、その下に長く高い鼻の顔がある。細い目がにこやかに駒夫に向けられる。

「坊っちゃんですか」

「はあ。二男の駒夫です」

「まあ、お利口そうな坊っちゃんですこと……」と、紳士の隣りにいた夫人が声をかけた。

マフラーだけ白く、あとは紺色づくめの洋装姿の夫人に、和服姿の母親に慣れていた駒夫は、すっかりおされてしまった。紳士のかたわらには、これも目の細い少年が、学習院初等科の制服を着て立っていた。「長男の義彦です」と、紳士は紹介した。そして、反対側の夫人の腰のかげからは、夫人にそっくりの目の大きな少女が、まるで珍しい動物でも見るような顔つきで、こちらをじっとうかがっていた。

「長女の桃子ですの。さ、ご挨拶なさい。だめですねえ、あなたは。そんなふうに、お顔をつきだすようになさって。こんにちとはとか、よろしくとかおっしゃるものよ。ごめん下さいませね……この通りのわがままもので……。駒夫さんておっしゃいましたわねえ、どうかお遊びにお出かけ下さいませ、どうぞ……」

夫人の高くふくらみのある声を残して、四人の家族が去っていった。これが、フランス大使館附武官から海軍省勤務となつて二年ぶりに日本にもどってきた常盤伯爵一家と駒夫との、最初の出会ひであつた。

駒夫の父、源一は、常盤宣彦より海軍兵学校で六期も上なのだが、皇族出身の相手の身分を意識して、道で出会つても、まことに丁重であつた。しかし、父親の源一のそんな思惑にはおかまいなく駒

夫は、いわれた通り、早速、常盤邸の客になりに行った。そして、北歐風和洋折衷のこの邸内にあるすべてのものが、駒夫には驚異と魅惑の的となった。第一、ろくに主人たちが住みもしない邸内に、じいや夫婦に書生の青木、それ以外に女中が二人もいるのも不思議だし、それでいながら普段は、犬の鳴き声のほか物音ひとつ聞こえないのも、奇妙である。さらにその邸内には薄暗い部屋がいくつもあり、それらを使えばどんな遊びでも発明できそうなものが、たまらない魅力であった。厚い敷物を敷いた洋間の壁にかけてある巨大な油絵、それはほの暗い森林に集う裸婦たちを描きだし、その下の紫檀のテーブルや椅子の唐草に似た曲線模様、その向かいの飾り棚に並べられた金銀の、菊の紋章入りの盃、菓子皿、長持ち型の小箱、それらすべてが実にものめずらしく、かつ、きらめかしく思われた。「これ、おじいさまよ」と、飾り棚の上に掲げられた肖像画を指さして、桃子が教えてくれた。通常礼装の左胸に大きな勲章をつけた八の字ひげの海軍将官である。

それに、桃子の所有する雑多な財産も、駒夫にとってはめずらしいものばかりだった。たとえば、六頭立の馬車と王子と王女の人形のセット。これには、小姓たち、斧をもった兵士たち、馬にまたがった騎士たち、貴婦人たちの人形が何十となく附属している。それに、黒、赤、青、緑のドイツ製四色シャープペンシルもある。三度目に遊びにいったとき、桃子はこともなげにそれを駒夫にあげるといいだした。駒夫がうけとるのを渋ると、桃子はかれを見据え、唇の両端を下に曲げるようにしながら、「どうしても、あげるんだから」といいはった。やむをえず駒夫がそれを家にもって帰ると、果たせるかな母親の綾は血相を変えて叱った。

「返してらっしゃい。そんなものもらってくるなら、もう常盤さんのお宅にいくんじゃありません」綾は、三日にあげず息子が常盤邸に入りびたっているのを、快く思っていなかった。そして、夕食のあとなどで夫の源一にこう訴えたものである。

「今日も、学校の帰りにそのまま常盤さんのお邸にいつてしまったんですよ。お昼はこちらでさしあ

げますって、ばあさんから電話がかかってくるんだから……」

「いいじゃないか。あまり気にするな」

「でもあなた、こちらの方がクラスも階級も上じゃありませんの……いくら、あちらが皇族出でも」

「気になるなら、そのうち礼にいけばよからう」

「そうなるから、わたしは嫌なんですよ」と、綾は吐きすてるようにいった。

しかし、綾の心配は、そう長くは続かずですんだ。駒夫の方が、ばあやや書生、とくに書生の青木に気がねして、しばしば塀をのり越えるようになり、やがて、ひとところほどしげしげ桃子のところに遊びにいかないようになったからだ。それというのは、かつての秘密の城館も、駒夫にとってしだいにそれほど魅惑的ではなくなっていたのと、踏み切りの子ども用ではない、本物の自転車を買ってもらったおかげで、遊びの行動半径がぐっと広がったせいなのである。あるいは綾は、それを見越して新車を買いたえたのかもしれない。それでも、桃子の満六歳の誕生日には、ばあやから電話がかかり、駒夫も招待された。母親の綾は、「奥さんが電話せずにはあやにかけさせるなんて、お高くとまっているわ」と、いささかお冠りだったが、こちらも女中の松にお祝いをもたせて、駒夫を常盤邸に送りこんでくれた。その翌年の春、女子学習院に入るため桃子は東京に移ることとなり、そのお別れにと、ふたたび駒夫は常盤邸に招かれた。妙に整頓されてしまった桃子の部屋で、彼女は駒夫の首に両手でぶら下がり、「駒兄ちゃまと別れるのは嫌」とくり返した。その白いほっぺたには、早くも娘らしい感傷をこめた涙が筋をひいたが、駒夫の方は、こんな局面は生まれてはじめてで、青木でも入ってきはすまいかと、気もそぞろの有様だった。

起床時間は刻一刻と迫り、それを感じとる分隊全員の気迫、とくに三号生徒十五名の緊張感はいかに張りつめたものになっていった。駒夫もすでに完全に、夢の追憶から離脱し、現実に向き合いはじめていた。きのう、五月一日で三週間にわたる入校教育が終わり、今朝からは名実ともに一人前の

海軍將校生徒としてあつかわれることとなっている。昨夜、夜の自習時間が終わって二階のこの寝室に上がろうとするとき、自習室の最後列の机から、一号の先任者で分隊のたばね役たる伍長の三島生徒が、甲高い声をあげた。

「三号、待て」待てをかけられたら、立っているものはその場で直立不動、腰かけているものは両手を膝におろし正面を向かねばならない。

「貴様たちの入校教育も本日をもって終了した。これで貴様たちも一人前の三号生徒である。したがって明日からは一号も、そのつもりであつかうから、覚悟しておけ」

「ええ、三号。これまでのようにでれでれしておると勤まらんぞ。どしどし修正してやるから、そのつもりでおれ」と、二号席に近いところから一号十五席の柔道係、佐賀県出身の大山生徒が吠えるようにいう。

海軍兵学校では、新入の三号生徒が五十音順に配列されている以外は、名簿の順番、机の順番、すべて成績順である。したがって、一号十五席は最末席というわけだが、にもかかわらず大山生徒は、いかにも柔道二段といわんばかりのずんぐりしたからだをわざと猪首にかがめながら、つねにもっとも派手に三号をいためつけていた。

「本日は入校教育終了の成果を示すべく、もっとも果敢な就寝動作をやってもらう。終わり。ただちにかかれ」

「急げ」

「ぼやぼやするな」

駒夫たち三号は、わずか一分前後でベッドをメイクし着更えをすまし毛布にくるまる就寝動作、その反対に、とび起きて、着更えをすましベッドを片づける起床動作の訓練の仕上げに、一号たちの怒声に追われながら一段おきに階段をかけあがり、寝室に入った。